

願成寺報

平成三十年九月十日

〒四四〇・〇八二二 豊橋市東新町二十八番地

☎ 〇五三二・五二・九六〇一

■ 秋季彼岸・永代経のご案内

今このままを慶ぶことが 仏様への報恩です
そのままの慶びを ご一緒に 見つめ直しましょう

○ 餅つき・草取り会

猛暑の疲れが残ったままですが、
大切な行事の準備をします。
皆でやれば、きっと楽しい！
春き立てのお餅をオヤツにします。
是非、ご参加下さい。



九月 二十二日(土) 午後一時半 餅つき・草取り会

二十三日(日) 午後一時半 法要のみ

二十四日(休) 午前十時 法要・法話

正午 お斎(昼食)

午後一時 法要・法話

法話 浄泉寺(岡崎市)

住職 戸田恵信師

天国と浄土と娑婆(ファンタジーとして)

キリスト教の天国については勉強したことがないので、私のイメージは歌謡曲のものと同じです。

♪ 天国よいとこ一度はおいで 酒はうまいし

ねえちゃん綺麗だ ワーワーワッワー

(帰って来たヨッパライ)ザ・フォーク・クルセイダーズ

長い階段を登った先に欲望を満たす国がある。結局、歌の中でもそれは夢なのですが、そんな世界が天国だと思っています。

極楽浄土はこんなイメージです。

― 欲望が 欲する前から叶っている世界

一見、天国と同じに見えますが、浄土は、涅槃(煩惱滅尽)の世界です。だから「欲望を起こしえない世界」と云えます。そんな所で何をするのでしょうか。『浄土無為』は常楽と云うけれど、時間が止まったように退屈で、耐えられないかも…と俗物の私は本気で心配しています。

退屈した往生人は、娑婆世界に二種の生まれ方で戻ります。

煩惱有る凡夫は、仏を確かめるのが目的です。浄土で、仏ばかりで仏を忘れた人は、煩いと悩みを手掛かりに仏を仰ぎ直します。

煩惱無い生物は、煩惱を教えるのが目的です。煩惱の生物ばかりだと「煩惱」仏を確かめる道具」を自覚できません。煩惱の無い無垢な姿にて、凡夫に、生まれた意味を思い出させます。

そんないのちに溢れて、この娑婆は賑やかなのだと思います。

煩い悩みが深い時、こんな空想をし、やっと思えて過ごします。

* 浄土無為 生滅変化を超えた常住不変の眞実の世界

煩惱具足と信知シテ 本願力に乗ズレバ

スナワチ穢身ステハテテ 法性常楽証セシム

《善導禪師和讃和讃・親鸞聖人》

● 正信偈ノート②②・善導章 I

書き直しを恐れず、今、思い浮かぶところを書き留める

善導独明仏正意

矜哀定散与逆惡 光明名号顕因縁

黄色の勤行本の

三十七ページから

善導独り、仏の正意を明かせり。

定散と逆惡を矜哀して、光明名号を往生浄土の因縁として顕す。

〔浄土真宗本願寺派・注釈版聖典より〕

- ・ 独明仏正意 隋唐時代の居並ぶ高僧方の中で、ただ独り、仏教の神髓を明らかにした。狭くは、觀無量寿經を聖者の為でなく、凡夫往生の經として、正しく読み解いた。哀れみ悲しむこと
- ・ 矜哀 定善と散善に励む自力の仏道行者のこと
- ・ 定散 五逆と十惡の自己中心で煩惱まみれの悪人のこと
- ・ 逆惡 光明（如来の知恵）が縁となり浄土に目覚める
- ・ 縁光明 名号（彌陀の本願）が因となり往生を確信する
- ・ 因名号

・ 善導大師

七高僧の第五祖。仏滅一千五百年（七世紀）ごろ、中国仏教全盛の隋唐時代に活躍した僧。鳩摩羅什・地論宗慧遠・天台宗智顛・三論宗吉蔵などから少し遅れ、律宗道宣・玄奘三蔵と同時代。

十代で出家し聖道門の立場で『觀無量寿經（觀經）』を實踐したが証を得ず、二十代半ばで浄土門の道綽禪師に師事した。

三十三歳の時に禪師が示寂すると、活動拠点を国際都市長安の



光明寺に定め、多様の民衆を相手に精力的に称名念仏の教化を行った。『浄土変相図・觀經曼荼羅』の絵解き説法、『阿弥陀經』の書写事業などが功を奏し、爆発的な人気を博した。朝廷（高宗皇帝・則天武后）の信任も篤く、

大仏造営などを監督した。

後に法然上人に重大な影響を与える多くの書物を著し、六十九歳で弟子に囲まれて、その生涯を閉じた。

主な著作

『觀經疏』

古今の諸師の觀經解釈を匡し、經の真意を明らかにしようとしたもの（四帖疏）

玄義分 觀經の要義を七つの課題にて説明する
序分義 說經の契機（王舎城悲劇）を詳説する
定善義 定善十三觀の行を体験にて解説する
散善義 三福九品の散善の行を解説し

信心こそ往生の正因であると明かす

- 『法事讃』
 - 『觀念法門』
 - 『往生礼讃』
 - 『般舟讃』
- 阿弥陀經を主とした臨時法会の実修法を示す
阿弥陀仏の相好を觀想する方法と功德を示す
願生行者が日常実修すべき六時の礼法を示す
願生浄土・仏徳讃嘆の為の別時行法を示す

・ 二河白道の譬（生きることの意義）

觀經疏・散善義・回向發願心釈の中に、仏願に依じて歩む行者を鼓舞する説話が語られています。



荒れ狂う貪愛瞋恚の水火二河の波に洗われる幅四五寸・長さ百歩の細い白道があり、善友の待つ西岸へ続いている。東岸で群賊悪獸に囲まれた行者は、その甘言に迷い恐怖に躊躇うも、絶望の淵で渡河を決意する。その時、東岸より「往け」釈尊の發遣の声を、西岸より「来たれ」彌陀の召喚の声を聞く。励まし護られた歩みは、必ず西岸に到るとする。

貪瞋痴の煩惱こそ仏の声を聞く縁であり、あえて渦中を歩むこそこそ仏願に順じた生き方だと示されます。大師自身も欲望渦巻く長安の都を居場所として、願生浄土の信心を洗われました。

創作・善導大師の白道

キロロロロロと山鳥が啼いた時、涙が一筋頬を伝わりました。

お前も都に迷い込んでしまったのか。故郷が恋しいか。

道綽禪師をはじめ田舎の人々の純朴な笑顔が心に浮かびます。

シルクロードの終起点である長安は、雑踏と喧騒と欲望の都です。

賑やかな音を近くに聞き乍ら、大師は投身事件を思っていました。

光明寺の定例説法会にて、聴衆の一人が立ち上がり問いました。

―念仏すれば間違はなく浄土に生まれることができますか？

―念仏すれば必ず浄土に生まれます

男は大師の答えを聞くと礼拝し、念仏称えながら堂を出て、

門外の大木によじ登り、目を閉じ合掌し、そのまま身を投げました。

大師は驚き、男にも聴衆にも、自身にも、掛ける言葉を失いました。

―人我自ら覆い 同行善智識に親近せず

―仏願に順ずるとは平気で生きる事。道心を乱すな 迷惑千万

―独りで勝手に往生するなんて。それで本当に満足なのか？

大師は納得できない憤りの底に、小さな悲しみを見つけました。

キロロロロロ、山鳥はその木の根本に短い脚で立っていました。

瑠璃色の小さな羽は傷つき、もう飛べない様子です。

小さな頭に長い嘴、澄んだ瞳で大師を見上げています。

助けようにも跳ね逃げて、距離を保ちつつ大師を見つめます。

襲われても、傷ついても曇らない眼こそ信心のたまもの。

元々凡夫、娑婆を納得できる筈もない。同行あい哀れむべし。

結果を問うて曇る眼を、涙に洗いながら、一歩ずつ歩んで参ろう。

―西方阿弥陀仏 我衆生と共に 安楽国に往生せんと 願ひ奉る

キロロロロロ、山鳥の姿はもうありませんでした。

ただ、声と瞳の小さいのちは、大師の心に深く宿ったようでした。

〔七高僧ものがたり〕東本願寺等を参考に創作

坊主の心得 く自信教人信く

真宗僧侶の出発点は、本山での得度式です。

ご法主から、断髪を模した剃刀・おカミソリの儀を賜りますが、

この時、ご法主の言葉を復唱し、仏弟子の心得を心に刻みます。

私は、平成十一年の三月、三十九歳で得度しました。

剃刀の、ご法主直伝の大切な心得、心に深く刻んだ筈なのに、

全く思い出せません。無自覚だった当時の私を反省します。

ただ、「阿弥陀様のお手伝いをして下さい」の訓示は覚えています。

善導大師の『往生礼讃・大経礼讃』の中に次の偈文があります。

真宗僧侶の心得として一番に語られる事柄です。

南無至心帰命

南無して心を至し帰命して

礼西方阿弥陀仏

西方の阿弥陀仏を礼したてまつる

自信教人信

みづから信じ人を教へて信ぜしむること

難中転更難

難きがなかにうたたさらに難し

大悲伝普化

大悲をもつて伝へてあまねく化するは

真成報佛恩

まことに仏恩を報ずるになる

願共諸衆生

願はくはもろもろの衆生とともに

往生安楽国

安楽国に往生せん

〔訳 浄土真宗本願寺派・注釈版聖典より〕

中四句（主文）の解釈にはいろいろ難しい議論があるようです。

私は訳も疑いますが、漢文に暗く、抗議できなくて残念です。

なので勝手に、前置の偈文も参考に、次のように解釈致します。

大経に遇い、その教えを聞いて朋と慶び合うこと。

それは奇跡的な出来事だけれど、

大悲は既にあまねく伝わっているのだから、

必ず目覚め、仏を礼すべし、それが仏恩報じる事となる。

大雑把過ぎると叱られそうですが、これを心得として過ごします。

行事予定 平成三十年秋以降

九月二十四日(休日) 秋季彼岸・永代経法会(戸田恵信師)

お馴染みの先生の情熱的な法話です
お非時(昼食)あり
午前十時

十一月三日(土・祝) 本山納骨堂法会・団体参拝

本山へ貸切バスにて団体参拝します
午前十時

十二月一日(土) 報恩講

御開山聖人御恩に報いる法会です
お非時(昼食)あり

二日 午後一時半から
三日 午前十時から

毎月一日

月例会

午後二時 時間変更の場合等あります、
寺までご確認下さい

本山納骨堂法会・団体参拝のご案内

市内近郊のご寺院様と貸切バスにて日帰り参拝します

■期日 平成三十年十一月三日(土・文化の日)

■日程 六時三十分 寺集合

十時三十分 本山着

十五時三十分 大須観音散策

十八時三十分 豊橋着(予定)

*予定時刻は変更になる場合があります

■会費 八、五〇〇円

バス・昼夕食・旅行保険代他

■納骨 納骨希望の方は一霊につき二万円(納骨冥加金)

■申込 願成寺までご連絡下さい(十月二十一日まで)

■他 ご不明な点は寺までお問い合わせ下さい



後記

アカシヨウビン

台風一過の朝、境内で「キロロ」と鮮やかな声を聞きました。主を探すと、見慣れぬ綺麗な鳥が羽を怪我して座っています。近づくと、羽ばたきながら跳ねて逃げます。

飼われていた鳥かと思いましたが、調べると、野生のアカシヨウビンでした。ブツポウソウ目カワセミ科の渡り鳥で、

レッドブツクに載るほど希少な種類のようです。「火の鳥」の異名を持ち、伝説の多い鳥らしい。

保護を考え動物園と東三事務所の環境保全課に電話しました。

法律により野鳥を保護してはいけない自然に任せて下さい見殺しには出来ないと思いい「野鳥の会」に問い合わせました。

法律には罰則もあります 名古屋に保護センターありますが、名古屋に連れて行くのは無理なので、様子を見ることにしました。

一日目は、刺激しないように、水を近くに置きました。

二日目は、心が痛みましたが、水に餌用金魚を入れました。

三日目に、金魚はそのまま、鳥は姿を消しました。

猫やカラスでなく、無事に故郷へ飛び立ってくれたと思いたい。

そして、本紙のネタになってくれたことに感謝します。

ヒヨドリ

中庭ではヒヨドリが「ピヨ」と「ギャー」で大騒ぎしています。

二羽の「ピヨ」が恐るおそる飛行を練習し、

二羽の「ギャー」が遠くで見守ったり、餌を運び、励まします。

忙しい親の姿を見て、鳥の子育てでも大変だなあと感じます。

いのちの本質は願いかも

親は子に願いを懸け、子は願いに報いるように頑張ります。

親が懸けなくても、全てのいのちに仏の願いが懸かっています。

その願いに報いる生き方は、多分、個別の縁によって異なります。

不惑・知命を過ぎて耳順(六十歳)が近い私ですが、迷っています。

既に不惑が無理な私は、ジタバタする事で報いるしかありません。

